学校教育実践コース（英語専修）
イギリス文学史

「イギリス文学史」の授業評価報告書

英語教育講座　竹永雄二

1. 授業の目的と内容

1) 授業の目標

イギリス文学の歴史についての基本的知識を得る。特に Shakespeare（劇）、Dickens（小説）、Wordsworth（詩）の主要な作品を体験することにより、英語の素晴らしさを感ずることができるようになる。

2) 到達目標

(1)古代から現代まで、各時代の文学思潮、主要な作家の代表的作品、作品内容とその評価について説明できるようになる。

(2)イギリス文学の名作(今回は *Christmas Carol*)を読み、作品内容に深く心を動かすことができる。

(3)読んだ作品について自分の意見を適切に述べることができる

3) 授業の内容

(1)英文で書かれた文学史の内容的に重要な部分と思われる箇所を精選し、英文内容の解説とまとめを行った。この部分の内容を進め方は昨年同様である。一般的な英語力（特にコミュニケーション力）の向上、英語指導力の向上を目指す学生にとって文学史を学ぶ意義は何か、どのような素材を準備し、どのような指導法が望ましいか再検討しなければならないようだ。

(2)新しい試みとして授業の後半で、イギリス文学の名作の一つであり、芸術性の高い英語で書かれた *Christmas Carol* の第２章の英語を精読する活動を取り入れた。一方的な解説に終わらないよう、学生の側からの能動的な読みを促進できる方法を取り入れてみた。輪番制で担当者を決め、担当者は自分が教えるという自覚を持って予習をし、しっかりとした説明、担当ではないその他の学生からの質問を予測し、明快に答えられるよう、わからない箇所は事前に教員に質問にくることを義務づけた。過去に、２回生前期の授業「イギリス文学講読」では、この方法がかなりうまく機能し、双方向のやり取りが活発に行われ、授業全体を活気のあるものとした。

(3)代表的な作品の原文を引用しながら、主題や言語的特色について解説を加える。

2. 学生の評価と今後の改善に向けて

授業の 15 回目に、授業評価アンケートを行った。アンケート内容と結果は以下の通りである。

1) アンケート内容と結果（回答者 14 名）

授業者の作った調査項目への評価（一部）

①強くそう思う
②まあそう思う
③どちらとも言えない
④あまりそう思わない
⑤全くそう思わない

1.教員の説明の仕方はわかりやすかった。

①	②	③	④	⑤
1	7	5	1	0

2.教員の教材の使い方は効果的だった。

6	4	3	1	0

3.授業内容への質問・発言の機会が与えられ、教員はきちんと対応していた。

4	8	1	1	0

4.教員は授業を改善するように努力した。

1	9	3	1	0

5.この授業の目的・目標は達成された。

1	7	5	1	0

------------自由記述--------------

授業の良い点

- ・パワーポイントがわかりやすかった。
- ・ 内容は難しいものの、今まで全く知らない分野を知れてよかった。
- ・ 映像とともにクリスマスキャロルを学んだので頭でイメージしながら、訳ができた。
- ・ クリスマスキャロルなど、内容を詳しく読めたこと。
- ・ 教材・教具が工夫されていた。

授業の改善点

- ・内容を覚えた上で、どのように活かせるかをもっと聞きたかった。
- ・最初にゆっくりやりすぎて、後の方で急いでしまう。
- ・ パワーポイントのスライドを最初からプリントしてほしかったです。
- ・ 内容が多すぎる。詳しくやっていないのにテストが広範囲。

2) 反省と今後の課題

全体的に昨年度より評価が下がっている。問題点を明らかにするために、ひとつひとつ振り返ってみる。

（1）教員の説明の仕方はわかりやすかった。

文学史の解説については昨年とほぼ同じであった。ただ新しい試みとして、授業の後半でイギリス文学の名作を原文で鑑賞するために、*Christmas Carol* の精読を行った。第一のねらいは、授業時間外学習として予習･復習をしっかり行わせることであった。第二のねらいは、予習をして分からないところを授業中に質問し、担当者との質疑応答の中で疑問を解決して行くというやり方で、能動的な reading 活動を造り出して行くことであった。これらのねらいを達成するため、教員の側からの解説は必要最小限度にとどめた。しかし免許の取得を目的として、今回初めてイギリス文学の授業に出た他の専修の学生が5 名ほどいたので、彼らにとっては不満を募らせるやり方であったと推測される。初めての学生に対して丁寧に、繰り返し授業の進め方、その意義について説明することを心がけたい。

（2）教員の教材の使い方は効果的だった。

これまで作成したパワーポイント資料、作家・作品についての概説､作品の抜粋等を準備して配布した。今回は、簡略化した英文文学史を作成し、授業開始時に配布した。文学史の全体的流れをつかみやすくすることと予習・復習のために活用してもらうことをねらいとした。地味ではあるが昨年度からの改善点である。ただ難易度の高い英語で書かれ、視点が古くなっているところもあるので、平易な英文で書かれた文学史のテキストに切り替えることも考える必要がある。今後の課題の一つである。

（3）授業内容への質問・発言の機会が与えられ、教員はきちんと対応していた。

前述した通り、学生間の意見交換を活発にする目的で､教員の側からのテキストの全訳は行わなかった。授業を活性化するために取り入れた手法であったが、今回はうまく機能したとは言えない。能動的な読みを実践させるための働きかけをもう少し工夫してみる必要がある。

（4）教員は授業を改善するように努力した。

イギリス文学に親しみを持ってもらうために、児童文学を取入れたり、後半の作品読解では、理解の補助として映画利用した。親しみやすくする、分かりやすくすると言う点で一定の効果があった。親しみやすさ、分かりやすさの重要性を再認識した。それは決して学生に迎合することではない。

（5）この授業の目的・目標は達成された。

新しいこともいろいろと取り入れてみたが、一番重要な達成度に対する評価が昨年度に比べてかなり下がった。単調さを避けるために、変化を工夫したのであるが、その間の繋がりを十分造り出すことができなかった。全体がバラバラになってしまい、学生の不満感に繋がったようである。もう一つの問題点は、計画に示した文学史の内容を扱うことができなかった点である。約束して、それを果たすことができなかった訳であるから、改善のために新しい内容を付け加えたつもりであったが、学生の視点から見れば明らかな欠陥と映ったと思われる。慎重さを欠く予定変更は、決して改善に繋がらないことを教訓として、次年度の授業への取り組みに活かして行きたい。